



ゆりかご 園だより

2026.1.5



年末年始はゆっくり過ごせたいでしょうか。新しい2026年が皆さまにとってよき1年となりますことを心より願っております。季節は本格的な冬となり、寒波や大雪で登降園も大変な季節だと思いますが、子どもたちが日々元気いっぱい登園してきてくれることを楽しみにしています。日没も早くなっていますので、行き帰りの事故などには充分にご注意下さい。

さて、12月のつくってあそぼうでは、たくさんの保護者の皆さまに見て頂き、本当にありがとうございました。そうぐみもりすぐみそれぞれの「やりたい」を中心に置き、何度も話し合いを重ねてそれぞれ完成したのですが、保護者の皆さまへの披露のあと、ある5歳児の保護者の方から「青少年科学館に行ってあんなふうに楽しい思い出として残ったんだなと思いました」という感想を頂きました。

ミッシェル・フーコーというフランスの思想家は、出来事を記録として残す方法には言葉で表現する方法（言表）と視覚的に表わす方法（可視性）の二つがあり、その二つの間では必ず言葉が視覚に優先すると言います。簡単に言うと出来事として残しておきたい絵を現実を描くためにはそれを表す言葉が（実際に書くかどうかは別としても）必要になるということです。

これを今回のそうぐみについて考えてみれば、先ず青少年科学館に行ったという出来事を再現して小さい子にも見せてあげたいという思いが土台としてあり、その出来事を再現するために何度も話し合いをもち、その話し合いの中で紡いだ言葉の数々が子どもたち自身の設計図としての役割を果たした結果「そうぐみかがくかん」があのように素晴らしいものになったのだと思っています。

一方、そうさんが青少年科学館を楽しんでいた同じ時間、りすさんは頼まれていた買い物をするためにスーパーに行っていました。頼まれた物を探すだけでなくお店の中をたくさん見て回り、レジに並んでお金も払ったという経験がベースになって「りすさんのたのしいおみせやさん」につながりました。りすさんは、まだ自分たちの言葉で設計図を描き切るところまではいかなかったかもしれませんが、実際に他のクラスの子たちや家族が来てくれて自分たちがつくったものであそんでくれたことは大きな経験として積み上がったのではないかと思います。フーコーは出来事を再現することも一つの出来事だと言います。再現されずに消えていく出来事が無数にある中で、やってみようと試みたその経験は、きつとりすさんの心に残っていくのではないのでしょうか。

